

「アンナ・カレニナ」★★★★

2013（平成25）年2月12日鑑賞＜GAGA試写室＞

監督：ジョー・ライト

原作：レフ・トルストイ『アンナ・カレニナ』（新潮文庫刊）

アンナ・カレニナ／キーラ・ナイトレイ

カレニン（アンナの夫、政府高官）／ジュード・ロウ

ヴロンスキー伯爵（貴族の将校）／アーロン・テイラー＝ジョンソン

オブロンスキー（アンナの兄）／マシュー・マクファディン

ドリー（オブロンスキーの妻）／ケリー・マクドナルド

リョーヴィン（田舎の地主）／ドナル・グリーソン

キティ（ドリーの妹）／アリシア・ヴィキャンデル

プリンセス・ベッツィ・トヴェルスカヤ（ヴロンスキーの従妹）／ルース・ウィルソン

ヴロンスキー伯爵夫人（ヴロンスキーの母親）／オリヴィア・ウィリアムズ

リディア・イワノヴナ伯爵夫人（カレニンの古くからの友人）／エミリー・ワトソン

ソロキナ嬢（ヴロンスキーの新しい恋人）／カーラ・デルヴィーニュ

2012年・イギリス映画・130分

配給／ギャガ

＜やっぱり、この女優はこの時代の方が！＞

ゴア・ヴァービンスキー監督の『パイレーツ・オブ・カリビアン』（03年）（『シネマルーム3』101頁参照）、『パイレーツ・オブ・カリビアン／デッドマンズ・チェスト』（06年）（『シネマルーム11』20頁参照）、『パイレーツ・オブ・カリビアン ワールド・エンド』（07年）（『シネマルーム15』14頁参照）で大ブレイクした美人女優キーラ・ナイトレイが、役所広司らと共演した『シルク』（07年）はイマイチだった（『シネマルーム18』182頁参照）。また、カズオ・イシグロ原作の『わたしを離さないで』（10年）ではキャリー・マリガンと共演したが、どちらかということではキャリー・マリガンの方が目立っていた（『シネマルーム26』98頁参照）。また、直近の『危険なメソッド』（11年）では、口をゆがめ顔を引きつらせる演技やベット上でムチ打たれる演技で熱演していたが、これも賛否の評価は分かれるところ・・・（『シネマルーム29』121頁参照）。

私にとって、美人女優キーラ・ナイトレイの魅力が最大限発揮されていたのは、やはり『プライドと偏見』（05年）（『シネマルーム10』198頁参照）と『つぐない』（07年）（『シネマルーム19』306頁参照）で、彼女は、前者ではアカデミー賞とゴールデン・グローブ賞の主演女優賞に、後者では英国アカデミー賞とゴールデン・グローブ賞の主演女優賞にノミネートされていた。つまり、派手な顔立ちの古典的な美女（と私は思っている）には、この時代の、この手のドレス姿がよく似合うということだ。若手のイメージが強かった彼女も1985年生まれだから、もうすぐ30歳。そろそろ典型的なラブストーリーのヒロインに最適では？そう思っていると、このタイミングで、過去何人もの大スター女優が演じた「世界文学全集」最高のラブストーリーである『アンナ・カレニナ』のアンナ役が！1927年版、1935年版のグレタ・ガルボ、1948年版のヴィヴィアン・リー、1967年版のタチアナ・サモイロワ、1997年版のソフィー・マルソー等に比べると、まだ少し若いのでは、という不安はあるが、逆に薰り立つような若さが本作における彼女の最大の武器に！

＜帝政ロシア時代の中心はサンクトペテルブルク！＞

1917年の「ロシア革命」によって、1918年にはソ連の首都はモスクワに移転されたが、帝政ロシア時代の首都はサンクトペテルブルク。「帝政ロシア」は政治制度としては最悪（？）だが、その宮廷文化の華やかさは特筆モノ。『アンナ・カレニナ』と双璧をなす、トルストイの名作『戦争と平和』でも巨大かつきらびやかな宮廷でくり広げられる舞踏会のシーンををはじめ、華やかな社交界の様子は今では絶対に見られないものだけに、その特有の美しさが際立つため映画にはまさに最適！

本作は、政府の高官である夫のカレニン（ジュード・ロウ）と一人息子と共にサンクトペテルブルクに住んでいるアンナが兄オブロンスキー（マシュー・マクファディン）の浮気を契機として発生した妻ドリー（ケリー・マクドナルド）との「夫婦関係調整」のためにモスクワに赴くところからスタートする。そこで出会い、互いに一目ボレ（？）してしまったのが、貴族の青年将校ヴロンスキー伯爵（アーロン・テイラー＝ジョンソン）。あの時代はヨーロッパでもロシアでも貴族の青年将校がカッコいい職業の代表であつたうえ、ヴロンスキーはアンナの兄嫁の妹キティ（アリシア・ヴィキャンデル）がホレ込み、結婚の申込を期待しているほどの美男子だ。『戦争と平和』でも当初、ナターシャは遊び人のカッコいい青年将校にホレ込んだことによって道を誤りかけたが、さてアンナの場合は？

＜舞踏会の美しさは圧巻！そこで2人は？＞

本作前半では、そんなヴロンスキーの魅力にのめり込みながらも、それを懸命に振り払おうとする人妻アンナをキーラ・ナイトレイが表現力豊かに演じているが、舞踏会の場で2人でマズルカを踊ってしまうと、その自制心は限界ギリギリに。本作は第85回アカデミー賞の作品賞、監督賞さらに個人賞には全くノミネートされなかったが、撮影賞、美術賞、衣装デザイン賞、作曲賞にノミネートされていることからわかるとおり、前半のハイライトはこの舞踏会のシーンの美しさ。あっと息を呑む映像美であり、音楽との一体感もすばらしい。

現代ドラマならこのまま2人はどこかのホテルに入り、ベットインという展開になるところだが、「世界文学全集」はそうではない。何とかその場を切り抜けたアンナは今、一人サンクトペテルブルク行きの列車の中にいた。華やかな舞踏会のシーンから一転、無機質な列車の車輪のシーンへの転換もお見事だ。そして、停止した駅でほてった頬を冷まそうと一旦列車の外に出たアンナが、そこで目の前に見た人物とは？

＜まるでストーカー？2人の行き着く先は？＞

政府高官の美しき人妻と青年将校との道ならぬ恋。それが社交界のスキャンダラスな話題としてもちきりになったのは当然だが、本作中盤に見るヴロンスキーの行動はまるでストーカー。アンナの方はそれを何とか「理性」の力で振り切ろうとしたが、「肉欲」を含むヴロンスキーの魅力に負けてしまったアンナは、遂に道ならぬ恋に陥ってしまうことに。今時は主婦の「不倫」も軽いものだが、かつての日本と同じように、帝政ロシア時代は当然「姦通罪」があつたはず。また、本作で描かれるようにアンナの夫カレニンはあまりにも世間体を重んじる男であつたため、妊娠したことを告げて、離婚を願い出てもそれも認められなかったから、アンナは飼い殺しのような状態に。現在の日本の離婚制度は「有責主義」から「破綻主義」に移っているから離婚はきわめて自由だが、そんな感覚ではあの時代のアンナの苦悩は理解できない。したがって、しっかり自分の感覚を帝政ロシア時代のそれに置きかえて鑑賞する必要がある。

そんな視点でアンナとヴロンスキーの「スキャンダル」を直視すれば、こりゃもうどうにもならないところまで来ていることが明らかだ。そしてそうすると、ソロキナ嬢（カーラ・デルヴィーニュ）を新しい恋人に迎えたかのように見えるヴロンスキーの心は次第に・・・。「世界文学全集」に慣れ親しんでいる諸氏は、その後の展開とその本作結末は十分ご承知のはずだ。

＜地味だが、こちらの男にも注目！＞

『戦争と平和』では、ピエールとアンドレイの「ナポレオンの評価」をはじめとする「戦争と平和」をめぐる「哲学論争」が難解だが、結局最後にはピエールの存在感が大きくなる。それと同じように、『アンナ・カレニナ』ではストーリーの軸はアンナとヴロンスキーとの恋愛（悲劇）に設定されているが、そこでも最後は田舎の地主リョーヴィン（ドナル・グリーソン）の存在感が大きくなる。リョーヴィンはキティに求婚して断られてしまった、外形上はあまり冴えない男だが、ストーリー展開の随所で領主自ら住民たちと共に汗を流して働いている姿で登場してくる。その結果、貴族であつても、領主であつても、人間は大地と共に、神と共に、そして労働と共にあるべきだとトルストイが言いたかったことが、このリョーヴィンを見ているとよくわかる。そして、リョーヴィンはアンナとヴロンスキーとの道ならぬ恋の悲劇的な展開とは全く違う人生を歩むことに。すなわち、恋いこがれていたヴロンスキーがアンナとの道ならぬ恋に走った後、失意のどん底にあつたキティも今は率直に自分の非を詫びてリョーヴィンの許しを請うことになったため、結局2人は結婚し、子供にも恵まれて心安らかな日々を送ることになる。

ドストエフスキーの『罪と罰』『カラマーゾフの兄弟』はドロドロした人間性の分析とその掘り下げが難しいが、トルストイの方は『戦争と平和』でも『アンナ・カレニナ』でも、人間の理想像がハッキリしているのでわかりやすい。その視点からも本作では地味だが、こちらの男にも注目！